

『彼女たちの強さ』

難治性の貧血で入院と退院を繰り返していた41歳のM氏がある日、外来を訪れた時、「あの娘たち、みんな居なくなってしまうて…。なんでだよー、先生。寂しいなあー。」と涙を流しながら話されるのを聴き、私も胸がつまる思いであった。

大学病院時代、白血病や悪性リンパ腫といった困難な病気を抱えた方と多くの出会いがあったが、中でも若い方たちとの出会いは私の記憶の中に深く刻まれている。若者たちは、運命のいたずらなのか、突然病気に襲われ、そして治療の甲斐なく短すぎる人生に幕が下ろされた。それは、いつも、せつなく、悲しく、辛い関わりであった。

中でも、特にあの女性たちのことは忘れられない。同じ時期に、それぞれの病気と闘いながらも、時には1人の若者として、また女性として互いに語り合い、励ましあいながら、病気を克服できることを夢見ていたのであろう彼女たち…。あの1人1人の笑顔が今でも浮かんでくる。M氏はそんな彼女たちとある時期、入院生活を共にしたのである。

Yさんは現役女子大生であった。両親の元を離れ、遠く北の大地、北海道で希望と夢を抱き、大学生活を送っていた。しかし、そんな彼女に急性白血病という病気がふりかかってしまう。ちょうど帰省中の彼女は、私たちの大学病院に入院し、化学療法を受けた。残念ながら彼女の白血病は治療に反応しにくいタイプであり、治療効果は一時的で再発を繰り返した。さらに多くの薬に対してアレルギー反応が出現し、治療中もそれらの副作用に苦しんで

しまった。

目がくりっと、笑顔の素敵な彼女は、調子のいい時は、いつも冗談を飛ばして皆の人気者であったが、治療については両親に頼らず、自らいつも結論を出していた。骨髄移植を勧めた時もそうであった。彼女は「そんな苦しい治療には自分は耐えられない」ときっぱりと断った。

そして、ある日、もはや治療が難しくなってきた現状を踏まえて、「なるべく自宅に近い病院に移りたい」と希望した。あの時、彼女から、「あとどれくらいですか？」とストレートに尋ねられた私は、「はっきりとは分からないが、もう何ヶ月というのは難しい」と伝えた。彼女は涙一つ見せずに、「お世話になりました」と翌日退院した。数カ月後、地元の病院で亡くなられたという知らせが届いた。青春真っ只中の彼女は友人の待つキャンパスに2度と戻ることはできなかった。

Kさんは悪性リンパ腫を発症し、入院となった。化学療法を行うも、何回となく再発を繰り返したが、最後に行ったかなり強力な化学療法が効いてくれ、寛解（あたかも治ったような状態）に入ることができた。その後は他院



に通院して元気に過ごしていたが、4年後、妊娠18週という身重となり、久しぶりに大学病院を訪ねてきた。彼女ももう29歳になっていた。悪性リンパ腫そのものは、正直まだ完治したとは言えなかったが、彼女の強い意志で結婚、妊娠に至り、そして力強く「赤ちゃんを産みたい」と私に告げた。その気持ちをさえぎる物は何も無かったが、低ガンマグロブリン血症という



免疫力（抵抗力）が極めて悪い状態にあるため、それを補充しながら分娩の準備を進めていった。そして、無事、元気な男の子を出産したのである。その時の幸せに満ちた彼女の顔はもうしっかりと母親の顔であった。

しかし、それから約1年後、彼女は悪性リンパ腫の再発のため、入院となってしまった。ショックだった。難病を抱えた実母と長い間2人3脚で一生懸命生きてきた彼女には、このまま幸せな生活を送って欲しかった。

もはや体力的には治療を狙った強力な治療は難しく、なるべく副作用の少ない、だ

ましだましの治療を行うしかなかった。そして、できる限り、自宅に居て、夫や子供との時間を過ごせるようにした。それは彼女の選択でもあった。結局、彼女はその後も最後まで前向きに、あきらめることなく、死を迎えたのである。彼女の口からはとうとう最後まで弱音を聞いたことが無かった。

エッセイ13話で話題にあげたEさんも、ちょうどこの時期、入院されていた。彼女の話は先に書いたとおりであるが、妻として、また母親として、最後まで力強く生きぬいた人であった。

ここに登場した女性たちは皆20歳台である。病気にさえかからなければ、ごく普通の大学生、女性、妻や母親としての生活を送っていたことだろう。そんな彼女たちは、しっかりと病気と向き合い、傍に両親、夫、友人などに頼ることなく、自分で進むべき道を1つ1つ決めていった。一方で、時折見せる、若いエネルギーと愛らしさ、屈託の無い笑顔は私たちスタッフの心まで癒してくれた。

このような苦しみの中で、彼女たちの強さはどこから湧き出ていたのだろうか。やはり人間の強さは無限なのかもしれない。それとも、女性の強さと言うべきなのか。

あれからもう10年近くが経過している。